

アジア都市文化学専攻

人材育成の目標

東アジア・東南アジアを対象に、都市文化の現状と特性、その形成過程、さらに今後の可能性について、総合的、比較文化的に考究することを目的とする。伝統文化研究、現代都市文化論、文化人類学、芸術学、ポピュラー文化研究、観光研究など多岐にわたる分野を学ばせることで、アジアの諸問題を複合的にとらえる視点を涵養する。研究者、専門職業人のいずれの進路においても、これからのアジアを牽引することができる人材を育成する。

アジア都市文化学専攻

専修紹介

アジア都市文化学専攻は、2001年に大学院のみの専攻として設置された。本専攻は、アジアとの結びつきの深い大阪を拠点に、都市という視点を通じてアジアの諸文化にアプローチし、その独自性や多様性を解明することをめざしている。アジアの諸文化、とりわけ都市文化の現状と特性、その形成過程、さらに今後の可能性について、人文諸科学の成果を基礎に学際的、総合的、比較文化的な観点から考究しようとする本専攻は、従来政治、経済分野に偏りがちであったアジア理解を深化させ、アジア諸地域との真の意味での相互理解や文化的共存を志向するものである。

教員スタッフの専門は哲学・文学・文化人類学・芸術学・文化研究・観光文化論など多岐に渡り、地域的には東アジア（日本・韓国・中国など）および東南アジア（インドネシア・マレーシアなど）を主たる研究のフィールドとしている。スタッフはそれぞれの専門分野の特性を生かしながら、思想、制度、伝統文化、多民族共生、宗教、観光、環境、芸術、ポピュラー文化など、アジアの文化的諸事象についての教育、研究に従事している。

教育方針

本専攻では、学生の興味や関心を学問の対象へと昇華させるべく、個々の学生にたいするきめ細かな対応を心がけている。具体的には、教員それぞれの専門分野に関する基礎的文献研究はいうまでもなく、各学生の研究テーマにあわせたフィールドワークも重視して指導をおこなっている。そのさい多分野多地域の研究者が在籍することの利点を活かし、学生とは専門分野、対象地域を異にする教員を副指導担当として配することで、学生が自らの専門分野や対象地域を越えた学際的、比較論的な視点を身につけることに力を入れている。

具体的な指導内容としては、まず前期博士課程1年次にはアジア都市文化について幅広く学ばせるとともに自らの研究テーマや研究手法の明確化をはからせる。前期博士課程2年次には修士論文の完成を目指して研究テーマを絞り込ませた上で、問題設定、資料収集、資料分析と解釈、論文作成という一連の研究過程を細かく指導する。後期博士課程においては、専門研究者としての自主性を最大限尊重しつつも、博士論文完成に向けての方向付けや研究の各段階における支援をおこなう。同時に学会発表や学会誌、専門誌への投稿を促し、近い将来専門研究者あるいは高度な専門性を身につけた職業人として真に自立するための準備をさせる。

本専攻は、大学内に閉じた従来型の知にとどまらず、研鑽を通じて得た知見を社会の現場で生かすための実践知を重視し、研究と実践を結びつけようとする志向を持つ学生を積極的に受け入れている。それもあって本専攻には常に複数の社会人学生や留学生が在籍しており、彼／彼女らを軸に大学と社会の交流、さらには国際的な交流が日常的に実現されている。本専攻は学部に対応するコースをもたないため、必然的に所属学生は他学部・他大学出身者がほとんどであることもあって、専攻としてつねに外に開かれた自由な気風の醸成に努めている。

専修の特色

教室行事

教育、研究に関する教室行事として、教員、学生全員が参加する総合ゼミを学期に2回程度の割合で開催している。ここでは前期博士課程院生、後期博士課程院生の修士論文、博士論文作成のための研究発表をもとに、教員、学生による自由な討議がおこなわれる。

授業以外の活動としては、院生による研究会（アジア都市文化学研究会）が定期的で開催され、基本文献の輪読や研究発表などをおこなっている。

その他の特色

本専攻の特色として、社会人学生を積極的に受け入れてきたことが挙げられる。本専攻は他専攻に先駆けて前期博士課程、後期博士課程の両方での社会人学生の受け入れを開始し、これまでに地方公務員、教員、NPO 法人職員や、都市の計画・開発、アートマネジメント、マスメディア等の分野で活躍する社会人学生にたいして、専門性や学際性を高めるべく努めてきた。

所属教員

野崎 充彦（朝鮮古典文学、伝統文化論、民間信仰）

多和田 裕司（文化人類学、東南アジア地域研究、文化消費論）

菅原 真弓（美術史学、文化資源学、博物館学）

増田 聡（音楽学、大衆文化研究、文化所有論）

天野 景太（観光学、社会学、都市社会文化論）

堀 まどか（国際日本研究、比較文化学、日本語文学）

野崎 充彦 教授

NOZAKI Mitsuhiro

専門分野

韓国伝統文化論

最終学歴 ▶ 大阪市立大学大学院文学研究科

学位 ▶ 博士(文学)

〔研究内容〕

1. 朝鮮古典文学、なかでも人物伝記的な作品を中心に歴史と人物を読み解く。
2. 両班と呼ばれた士大夫らの文集を通じ、文化的ナショナリズムの形成過程を追う。
3. 民間信仰(風水・シャーマニズムなど)の視点から民族文化観の諸相を探る。
4. 映画などの映像資料を駆使し、伝統文化と現代社会との関わりを考察する。

メッセージ・教育方針

「理解しなくても愛することはできるが、愛することなしには理解できないものがある」私の座右の銘です。

独りよがりな好き嫌いに陥ることなく、また、いわゆる「客観的」な分析で事足りれりとするのではなく、常に現代に生きる人間としての問いかけを持ち続けながら対象に接することを目指しています。

〔主要業績〕

〔著書〕『韓国の古典小説』(ベリかん社, 2008, 共著)

『コリアの不思議世界』(平凡社, 2003)

〔訳書〕『洪吉童伝』(平凡社, 東洋文庫, 2010)

『青邱野談』(平凡社, 東洋文庫, 2000)

〔論文〕「風水マスターを通じてみる韓国風水の特質」(『術の思想』風響社, 2013)

多和田 裕司 教授

TAWADA Hiroshi

専門分野

文化人類学

最終学歴 ▶ 大阪大学大学院人間科学研究科

学位 ▶ 博士(人間科学)

〔研究内容〕

文化人類学の立場から東南アジア地域研究、とくにマレーシアを中心とした研究をおこなっている。現在取り組んでいる研究課題は、グローバル化、国民国家体制、消費社会の進展等を特徴とする現代社会における宗教の(再)定式化について、とくにイスラームを対象としてあきらかにすることにある。イスラーム(および諸宗教)に内在する理念や教義は、現代社会において「普遍的」とされる価値とどのように切り結んでいるのだろうか。理論的検討およびフィールドワークを通して、具体的な宗教実践にあらわれる両者のダイナミズムをとらえたい。

メッセージ・教育方針

研究分野からフィールド調査中心の指導と思われるかもしれないが、指導の基本は読む力の養成においている。学術的な文章を読みこなせない者に学術論文が書けるはずがない。大学院生であるかぎり自分の研究に関する文献だけではなく(それは自身で当然やっておくべきことである)、専攻分野の古典的著作は一通り読んでほしい。

〔主要業績〕

〔著書〕『マレー・イスラームの人類学』(ナカニシヤ出版, 2005)

『イスラーム社会における世俗化、世俗主義、政教関係』(上智大学アジア文化研究所, 2013, 共編著)

〔論文〕"Coexistence of Religions in Contemporary Malaysia," *Urban Culture Research* vol.2 - Coexistence in the Multicultural City - (UCRC, 2004)

「文化を売る: マレーシアにおけるふたつのソフトパワーをめぐって」(『人文研究』第64巻, 2013)

「視光の時代におけるイスラーム: マレーシアの事例から」(『人文研究』第65巻, 2014)

菅原 真弓 教授

SUGAWARA Mayumi

専門分野

美術史学・文化資源学

最終学歴 ▶ 学習院大学大学院人文科学研究科

学位 ▶ 博士(哲学)

[研究内容]

日本美術史。特に幕末から明治期にかけての媒体(版画、主に浮世絵版画)に関する研究が主たるテーマ。大転換期であった明治維新とその後の社会制度の激変は、常に時代の流行を描き出してきた浮世絵の世界にも大きな変革をもたらしました。そして肉肉なことに、時代に取り残された浮世絵はついに終焉を迎えます。単に「美しい」と愛でられる絵画ではなく、時代背景(社会的、政治的な)と密接な関係を持つ美術に関心があります。今後まとめようと思っている近代以降の「歴史画」もまたその一つ。

メッセージ・教育方針

研究に対するスタンスとして私が大切にしていることは「愚直」であることです。楽をして手取り早く成果をあげようとせず、資料を集めたりフィールドワークによってサンプルを集めたり、といった基礎的な勉強を「愚直」に行つて欲しいと思います。世界がアッと驚くような研究だって、最初の一步は小さなものだったはずですから。

[主要業績]

[著書]『浮世絵版木の十九世紀～風景の「時間」、歴史の「空間」』(ブリュッケ, 2009)

『謎解き浮世絵叢書 月岡芳年「和漢百物語」』(二玄社, 2011)

『評伝 月岡芳年 江戸と明治の狭間で』(中央公論美術出版, 2018年5月予定 ※近刊)

[論文]「日本美術における「奇想」の受容～月岡芳年を中心に～」(『神戸大学美術史論集』15号, 2016)

「浮世絵師・落合芳幾に関する基礎的研究」(『GENESIS(京都造形芸術大学紀要)』20号, 2016)

「落合芳幾研究—「東京日日新聞」錦絵を中心に」(『名古屋芸術大学研究紀要』第38巻, 2017)

増田 聡 准教授

MASUDA Satoshi

専門分野

音楽学・メディア論

最終学歴 ▶ 大阪大学大学院文学研究科

学位 ▶ 博士(文学)

[研究内容]

ポピュラー音楽研究を中心とした大衆文化研究。複製メディア技術の発展と普及により生じてきた新たな音楽文化の生産と受容の諸々について、主に美学的な関心に基づいてアプローチしています。録音メディアと作品概念、創作行為と作者性、剽窃・盗作と間テクスト性、人工音声キャラクターの主体性、著作権制度と音楽実践の相関などをこれまでテーマとしてきました。現在は、都市空間における音楽がもつ場所性について関心があり、携帯音響機器やBGM、ご当地ソングなどについての研究を極めてゆっくと進めています。

メッセージ・教育方針

大学は「勉強するため」の場所ではありません、と言うとほとんどの学生は解せない顔をします。しかし、その中に「なるほど」と合点した表情をうかべる学生がときおり存在し、そのような学生がやがて研究者の道を進んでいくのを幾人も見てきました。「大学は勉強するところではない」のであれば何をするといいのでしょうか。ひとつ考えてみてください。

[主要業績]

[著書]『聴衆をつくる—音楽批評の解体文法』(青土社, 2006)

『その音楽の〈作者〉とは誰か—リミックス・産業・著作権』(みすず書房, 2005)

『音楽未来形—デジタル時代の音楽文化のゆくえ』(洋泉社, 2005, 谷口文和との共著)

[論文]「真似・パクリ・著作権—模倣と収奪のあいだにあるもの」(『コモンズと文化—文化は誰のものか』東京堂出版, 2010, 山田奨治編)

「データベース、パクリ、初音ミク」(『思想地図』Vol.1【特集:日本】、NHK出版, 2008, 東浩紀・北田暁大編)

天野 景太 准教授

AMANO Keita

専門分野

観光学・都市社会文化論

最終学歴 ▶ 中央大学大学院文学研究科

学 位 ▶ 博士(社会学)

[研究内容]

「観光」を社会現象として捉え、現代観光の社会・文化的な特質を、主に社会学的な視点から読み解くことを課題としています。具体的には、相互に関連しあう以下の4つのテーマ、①アーバン・ツーリズムの総合的研究、②都市や地域における人々や文化の結節点(駅や盛り場空間など)の生成と展開に関する研究、③ニュー・ツーリズムの観光文化論、④観光行動におけるメディア・コミュニケーションの役割に関する研究、について、国際比較を念頭に置きつつ、日本をフィールドとしながら探求しています。

メッセージ・教育方針

種をまかず、肥料をやらなければ美味しい果実は実りません。大学(院)での学びも同じで、果実だけエレガントにいただく、つまり出来合いの理論や学説をつまみ食いするだけではなく、ものごとを一から地道に考え抜く実践こそが、迫力を持った研究成果を導きます。私も学生の皆さんとともに思考し、試行錯誤する姿勢をもって授業に臨みたいと考えています。

[主要業績]

- [論文] 「景観展望観光の歴史とその特色：日本の大都市におけるタワー・ツーリズムの展開を中心として」(『日本観光学会誌』第48号, 2007)
「駅文化の国際比較研究 序説：大都市ターミナル駅における駅文化の展開を手がかりとして」(『中央大学社会科学研究所年報』第12号, 2008)
「携帯位置情報ゲームと観光経験：ゲーミング・ツーリズムの実態と展望」(『論叢 国際関係学部篇』第16巻67号, 2011)
「盛り場空間の社会生態学：アーバニズムの下位文化理論から捉えた東京・渋谷」(『国際関係学研究』第24号, 2014)

堀 まどか 准教授

HORI Madoka

専門分野

比較文化学・日本研究

最終学歴 ▶ 総合研究大学院大学(国際日本研究専攻)

学 位 ▶ 博士(学術)

[研究内容]

「境界の文学、文学の境界」をテーマに、比較文化や文芸交流史の研究を行っています。

- 20世紀転換期の知識人や詩人の研究。(野口米次郎など)——象徴主義、神秘思想、「東洋」への関心空間と、モダニズムの芸術運動の歴史と人的ネットワークを探る。
- 日本の文化・芸術・文学の普遍性と特殊性——どのように国外に発信され受容されて、また国内で再構築され、また国際的なモダニズムの芸術潮流につながっていたか。
- 戦前戦後の日本語文学の研究——国民国家の集団的記憶に関わり、思考方法や倫理観、文化意識に影響を与えている「文学」を研究することの可能性とは？

メッセージ・教育方針

大学院では、失敗を恐れず、結果よりプロセスを重視して幅広く挑戦してみましょう。既存の枠にとらわれず、しなやかに、少し頑固に研究してみたい人。幅広い好奇心と疑問を持ち、人間やその歴史を愛し、簡単にめげない人。大阪という個性的で闊達な都市で、人文学研究の可能性、そして自分自身の可能性について、拓いてみませんか？

[主要業績]

- [著書] 『「二重国籍」詩人 野口米次郎』(名古屋大学出版会, 2012, 単著)
『バイリンガルな日本語文学：多言語多文化のあいだ』(三元社, 2013, 共著)
『近代日本とフランス象徴主義』(水声社, 2016, 共著)
『「Japan Today」の研究—戦時時期「文藝春秋」の海外発信』(作品社, 2011, 共著)
[論文] “Yone Noguchi’s Poetics as a Writer of ‘Dual Nationality’,” (*Artistic Vagabondage and New Utopian Projects: Transnational Poetic Experiences in East-Asian Modernity(1905-1960)*, (IRCTS, March, 2011))

